

---

# バイオハザードChapter1

eclair13farron

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バイオハザードChapter 1

### 【Nコード】

N6646W

### 【作者名】

clair13farron

### 【あらすじ】

恐怖は人の最大の弱点かもしれない・・・

死者は人肉をもとめさまよう

人間は生き残れるのか!?

## バイオハザードChapter1（前書き）

私今回初めて挑戦します

バイオが大好きで

発売日にリバイバルセレクションを買ったのですが  
なんと、その前日入院

あらら

ドジを踏んだせいでなかなかプレイできませんでしたw

初心者ですが「まあ、見てやるか」みたいなノリで見て下さい^^

# バイオハザード Chapter 1

# Chapter 1

A 5x3 grid of dots. The dots are arranged in 5 rows and 3 columns. The bottom-left dot is missing, leaving a gap.

この長い夢は、いや悪夢はいつ覚めるのだろうか

普段の一分が十分に、一時間が何時間にも感じられるような感覚

気を抜くことすらできない

大切な人は死に、街は一晩で壊滅

人間の形をした化物は執拗異常に襲いかかり、恐怖をあおる

「生き残る」

その言葉は何よりも重い気がしたのだ

俺の中での一生のトラウマであり続けるだろう……

休日の昼

ウォードはバーで飲んでいた

昼間から飲むのはいただけないが、仕事がなかったり、中毒で飲んでいるわけではない

彼の趣味なのだ

極度の酒好きに加え、ガンマニアである

後者は彼が元軍人だったので分からないこともない

自宅には酒のコレクションや、ハンドガンからマグナムに至るまで武器をコレクションしている

話を戻すと、なぜバーで飲んでいるかと言うと

同僚の女性警察ラムが遊びの誘いを断ったからである

特別気があるわけではないが、一人で行動することが苦手なウォードはラムが断ったと

分かった時からここにきて酒を飲もうとした算段である

バーのマスターが話してきた

「なあ、ウォード」「最近話題になっている人喰い病って知っているか？」

「ああ、警察の中でもメインで取り上げられているからな」とウォードは返した

「それに、俺が専属している特別警察ではそれに備えて訓練で最近厳しいよ」

人喰い病

最近この街で噂されている（ニュースにもなっている病気である）病気であると言っても見た人がいないからあくまで比喻である

人間が人間を喰らいつくとかそういう噂である

実際死体が見つかった時、ぐちゃぐちゃな姿で見つかったのを映像で見たウォードである

ウォードはすでに結構な量の酒を飲んでいた

が、酒を飲んでも飲まれるな主義であるウォードはまだまだいける口だ

時間はそれなりに経っており、ガラス越しに空が暗んできた頃だった

「ガチャ」

「いらっしやい」とマスター

しかし、様子が変だ

なんというか、インフルエンザで青ざめた人がふらふらしているみたいだ

うめき声も聞こえるし、目も白目をむいている

一般の客が心配して近寄ろうとした時、ウォードの直感が働いた

「そいつに近寄るな!!」

脚のホルスターからハンドガンを引き抜いて構えた

「動くな! 動くなと言っている!!」

よろよろと近づいてくる

発砲した

「パン、パン」

左足に二発、しかし、動きが止まらない・・・

「こいつ・・・」

次は普通の人間なら動けなくなるだろう急所を撃った

「パン」

止まらない

今までで初めてだ

強盗、テロリスト、そいつらの中でも撃たれても根性か何かで動く奴がいる

だが、動くといっても痛そうにはするし動きが鈍くなる

今のこいつにはそれが全くない

「マスター、ショットガンを貸してくれ」

マスターの生い立ちこそ知らないが、同じガンマニアとしてバーにはホンモノが飾ってある

だからこそウォードと話が合うのだろうが

「ガチャ、ズトオン」

胴体を撃ちぬいた

ようやく倒れ、動かなくなった

「もしかしたら、これが人喰い病・・・なのか!？」  
マスターは言った

それと同時に、他の客が「これが最近噂になっている」何たらと騒ぎだし

パニックになった

店から何人か逃げ出した

「おい、中の方が安全だここに」とウオードが言う前に消えていった

「うわぁ何だ来るな」「ぐわぁぁぁぁー」

すぐに聞こえてきた声は、間違いなく今さっき出て行った連中のそれだ

客の一人がドアに鍵をかけた

「おいおい、喰われているぞアイツら」「どうなっているんだよお」

「ひい!」

男は尻もちをついた

ガラスに奴らが張り付いている

「お前らの肉も喰わせろ」とは言っていないが、動作で分かる低下しているだろう知能で強化ガラスを懸命に叩いている

人間よりも力が強いのは見ていれば分かる

「おい、皆各々武器をマスターから貰え」

「ここはマスターと俺で時間を稼ぐから、裏口から逃げろ」

「近くの病院に逃げ込め!」

「それでいいよな? マスター! 試し撃ちがしたかったんだろ!？」

とウオードが言った

「へっ! 悪い冗談言ってくれるなよ」「こっちだってちびりそうなんだ」

「まあいい、このデザートイーグルを試食させてやるから感謝しな化け物」

強化ガラスの先にバリケードとしてイスやテーブルをを固めた

クモの巣のようなヒビが徐々に大きくなっていく

！！！！

バリンという音とともに奴らがダラダラッと流れ込んできた  
すでに他の客はここにはいない

ウォードがショットガン

マスターがデザートイーグルを構え発砲した

やはりハンドガンと違い、威力が高い

頭部に一発撃ち込むときれいに吹き飛ぶ

マスターのデザートイーグルは言うまでもない

マスターのテンションも上がってきている

が、続々と流れ込んでくる化け物どもに弾が追いついてこなくなってきた

二人とも勇敢に戦ってはいるが、人間の姿と何の変色もないこいつ等と

化け物じみた耐久力のこいつ等を相手にしていて恐怖や驚きが少なくとも隠せないでいた

ショットガンの弾は切れウォードはマシンガン

マスターは相変わらずデザートイーグル

「くそっ弾切れか・・・」マスターがポケットからマガジンを取りだそうとした時

手が滑った

無意識に手が汗ばんでいた

無理もない、こんな状況で平然を保てる人間など銀河系に一人もないだろう

もう一つしかマガジンがなかったので、マスターは拾おうとした  
もちろん奴らとの距離を保って



だが、倒れている奴のそばに落ちたマガジンを拾おうとした時であった

想像はつくだろう

「倒れている」だけで「死んでいる」訳ではなかった

「噛まれた」

やっと食べれると言わんばかりの噛む力である

「うおおおお！」マスターは叫び、銃で思い切り頭を殴った  
奴の動きは止まった

だが、手首の肉が見えるほど食いちぎられた

「マスター大丈夫か!？」

ウォードも気が抜けない状態で、マスターを見ることができないが  
声で分かったのだろう

「ああ、だが手首を噛まれた」「骨が見えてやがる」

マスターが無事で（無事ではないが）ウォードは安心した

「そろそろ俺らも移動しよう、マスター」

「ああ、そうだな」「奴らとの距離が近いからな」

「まあ、お前だけ行けやウォード」

「アンタは？」

「なーに、俺はさっき脚を噛まれている」「一緒にいても足手まといだ」

実際マスターは、噛まれた手首のせいで気が散り、さらに銃の反動  
に対応しづらくなり

脚を二か所噛まれていた

「死ぬ気か!？」

「バカヤロー、こんなとこでくたばるかってんだ」「いいから先行  
け」

本来警察官である自分が残るべきなのに・・・

「警官のお前が、先病院に行った奴らを護ってやれ」

「くっ、分かった」「死ぬなよ」

ウォードは正義感が強い

マスターは一般市民

残るのは自分と考えるべきだが、他の奴を頼むと言われたら

人数からしてそちらを選ぶ

ウォードは裏口へ向かった

「ケッ！一体何体いるんだ、お前らは」

「デザートイーグル」反動が大きいこの銃は一般人が撃つことによ  
って

健康を保証できない

それを何発も撃ち込むマスターの実力はそうとうなものだが、弾が  
切れた

ハンドガンでは対処できない

「さて、俺もそろそろ逃げるか」

裏口までは数十メートル

脚を引きずりながら向かった

「よしっのろまめ！これで・・・」追いつけないだろ  
と言おうとした時である

裏口が開いた

ゆっくりと・・・

マスターは血の気が引いた

裏口から入ってきた・・・

よく考えれば、先に逃げた連中が何事もなく裏口から逃げれた方が珍しい

これだけ侵入してくるコイツらは裏口からでも入ってこれるハズだからだ

いや、手はまだある

コレクションの一部をバーに持ってきている部屋がある  
それも裏口の近く

ただパスワードが必要だ

「イエローシャンパン」これだけ打つのに  
間違えなければ二秒で打てる

ただ、今は動揺、緊張、手首のけが

この複数のマイナスによって時間がかかっていた

カチカチカチ

あとは「パン」だけだ

距離は二メートル

イける

と思ったが誤算だった

「飛びついてきた」

よりによって脚にしがみつき、噛みついたのだった

バランスが崩れよろけたスキに

待ってましたと言わんばかりに、奴らがのしかかる

耳はかじりとられ、腹からは内臓が飛び出し、喉も喰われて声が出

ない

「ハハっ、痛みすら感じねーな」と心の中で思った

視界は暗くなり、意識も遠のいた

そして深淵に引きずり込まれていった

二度と明けることのない暗闇に・・・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ウォードは途中化け物に遭遇したが、奴らの遅さと道の広さで相手にしていなかった

マシンガンの弾は切れて、愛銃のハンドガンだけを装備していた病院が見えてきた

「着いたぞ、バーの連中は無事か!？」 「マスター生きて来いよ」と心の中で思った

そして、地獄の入口へ吸い込まれて行った

## バイオハザードChapter 1（後書き）

いかがでしたでしょうか？

まだ続くのは見ての通りです

あまり一つにまとめると疲れるしね

興味があつたら次回も見て下さい^^

## バイオハザードChapter2（前書き）

### 第2話

かなり遅くなりましたが完成しました

まあ、適当に上から目線でreadしてあげて下さい

## バイオハザードChapter 2

### Chapter 2

高くそびえ立つ病院

こういう時にはなおさら大きく見える・・・

夜は気温が下がり「ヒュー」っと風が流れるのを感じる

後ろからは奴らが追ってきているので、さっさと病院に入った  
普通の自動ドアは時間带的に閉まっているので、非常口から入った

「ガチャリ」

鍵を閉めた

ウォードには考えがあった

病院の屋上にへりを呼び助けを待つという考えだ

すぐに救助を要請した

「こちら特別警察ウォードだ、この街は汚染されている」

「人喰い病の影響だ、おそらく」 「救助を要請する」

「分かった」 「ただ、その病院なら少し時間が掛かる」

それを聞いた後通信機を切った

自動ドアに奴らが、張り付いている

どうやら、非常口から入ってこれない事や、今までの行動からして  
知能は相当低いみたいだ

ただ、生命力、食欲といったものが著しく高い  
まず、銃を撃っても構いなく近づいてくる

頭を強力な武器で吹き飛ばすのが得策だろう  
まだ、奴らに関することはそれくらいしか分からなかった

「さて、バーから逃げてきた皆を探すか」  
さっきから他の特別警察に連絡を取っているが、返事がない  
女性警官ラムもそこに専属しているが、返事がなかった・・・  
「みんな、無事だろうな」

ここの病院は1階から10階そして屋上がある  
一つ一つウオードだけで生存者及びバーの皆を探すのは骨が折れる  
ので

人手が欲しかった

その時だった

「ガサッ」音がした

「誰だ!？」

ウオードは愛銃のハンドガンを構えた

「おいおい、撃つなよ」「バーから逃げてきたやつだよ」

「奴らかと思って隠れていたんだ」

その男の名前はマービン

少し挙動不審だが、まあいいと思った

「マービン、これから俺とアンタでここの生存者を捜す」

「何もないければ、たくさんの生存者が見つかるハズだ」「病院だか



らな・・・」

まずは1階からだ

ウォードが左半分、マービンが右半分を担当

マービンはマスターからハンドガンを貰っていたので武器は大丈夫  
そうだ

「いいか！もし遭遇したら頭を狙うんだ」

「分かったよ・・・はぁー何でこうなったのやら」

・・・

マービンは普通の会社員

子供が二人いるので本来休日である今日は子供と遊んでいないとい  
けないハズだ

だが、妻と喧嘩をしてやけをおこしてバーで酒を飲んでいた

マービンは家族の事が心配で仕方がなかった

本当なら今すぐ家族のもとに行かないといけないのだが  
病院の外に出ることは、すなわち「死」を意味する

それを承知で助けに行こうとしたのだが、ウォードに止められた

「今は我慢しろと、あとで必ず助けるから」と

それに生存者を見つけヘリに乗ってポイントポイントに降りた方が  
効率がいいと言われた

「確かに最終的には家族が助かる確率が上がるかもしれないから我  
慢だ」と自分に言い聞かせた

夜の病院は暗かった

ほとんど見えず、緑の非常ランプが不気味さを際立たせるのに役に

たっていた

ガクガクと足が震えていた

病人のためのコンビニの所を通り掛かろうとした時だった

ゴソゴソと物音がした

マービンはへっぴり腰になりながら下手くそにハンドガンを構えた  
手の中は汗だくだった

「奴らか!？」

口から心臓が飛び出そうだった

バーから病院に向かう時、捕まった人間がいくらかいた

どうなったのかは分からないが叫び声がしたのが耳にこびりついて  
いる

どうなったのかは分からない？

いや、死んだだろう

奴らによって

その奴らが今いると思うとパニックという言葉が可愛く思うほど動  
揺していた

が、出てきたのは人間だった

「って人間かよ」とマービン

安堵のため息をついた

「人がせっかく酔いをさますもん食ってんのによ・・・その銃でさ

めたわ」と男が言った

この後さらに奥を探索したが生存者を見つけられなかった

死亡者もいなかったなのでここには「ルイ」というこの男しかいなかった

・  
・  
・

時は少しさかのぼり

左側へ向かったウォード

マービンを一人で探索に行かせたウォードは心配していた

奴らと直接戦っていない一般市民を一人で探索に行かせるのはあまりにも無謀ではないか？

と自問していた

特別警察である自分がここまで動揺しているからだ

撃っても撃っても近づいてくる奴らは「恐怖」の塊でしかない

と思ったウォードは「いや、今は探索に集中しろ」と自分に言い聞かせた

だが、結局生存者は見つからなかった

死亡者もないところを見ると先に上の階に上がっているのかもしれない

それに、奴らはどうやらないようだ

真ん中の集合場所に戻るとマービンが一人の男を連れてちゃんと戻

っていた

「マービン、無事だったか！そっちの人は？」

「俺はルイだ、よろしくなおまわりさん」とルイが言った

集合場所の正面玄関の近くにあるガラスのカギのかかった自動ドア  
すでに多くの奴らがドアを叩いていた

バーの時より耐久があるので壊れはしないだろうと思った

するとマービンが「エレベーターは動かないな、階段を使うしかない  
さそうだ」と言った

確かに左側を探索した時に見かけたエレベーターも動かなかった

普通は動くはずだが・・・

仕方なしに階段を使い、2階の生存者を捜した

「ピシッ」ガラスにひびが入っていた

3階までは空間が1階まで見えていて、つまり見上げたり見下ろす  
と1階や3階が見える

診察を主にした1～3階のフロアである

もう1人生存者を発見した  
リサという女性だ

看護婦で3階にずっと隠れていたらしい

「ん、ちょっと待てよ？」「バーの生存者じゃないのか！？」とウ

オードは思った

しかも、さっきから奴らが全くいないところを見ると病院内で彼女しか見つからないのもおかしい

「この上の階に何かあるのか？」と思えずにいられなかった  
リサも何も話したがらない、やはり何かある

#### 4階

また、右側左側を二手に別れた

ウオード&リサチームとマービン&ルイ

戦闘能力を考えるとこの組み合わせしかない

マービンに通信機を持たせ、いつでも連絡できるようにしておいた  
ウオード、マービン、ルイがハンドガンを所持して別れた

ウオードはしらみつぶしに病室を周ったのだが衝撃的だった

皆死んでいる

血まみれだ！しかも奴らに噛みつかれた後ではない  
あきらかに第三者のせいだ

「リサはこの光景を見ていて、それで話せなくなったのか・・・？」  
と心で思った

最後の病室もやはり残虐な絵が飛び込んでくるだけであった

「ポタ、ポタ」

「！！！！」「何だ！？」「急に上から降って来た液体にウォードは驚いた  
「な、なんなんだコイツは！？」

「化け物」という表現がふさわしいにも程がある！！

全身真っ赤の皮膚に脳みそが丸見えで、舌がベロンと垂れているし  
かも、鋭い爪

戦闘のプロであるウォードは驚いた後すぐに冷静になった

「ん！？」

距離がほぼ真上の2〜3メートルだというのに襲ってこない

「こいつ、目が見えないのか？」

やはりウォードの直感はあるに違いない

静かに行動すれば問題なさそうだ

ゆっくりと足音を立てずに右側に向かった、マービン&ルイの所へ  
向かった

別れる所、つまり中心のところにリサを待機させ右側に向かうと  
した時

無線が入った

「ウウ、ウォード！化け、化けもんだ、たたたすけてくれ」と

「いいかよく聞け！絶対に物音をたてるなよ！！奴らは目が見えな

い」

「分かったよ・・・早く来てくれ」と小声でマービンは言った

急ぎ足で向かった奥から3番目の病室

奥の隅に二人でしゃがんでおり真ん中の天井に奴が張り付いていた  
こっちにゆっくり来いとジェスチャーをした

まず、ルイがゆっくりゆっくりとこちら側へ来た

手や足がぶるぶる震えていたが何とかこちら側へ来ることができた

「さあ、マービンこっちだ」とウォードが仕草でやった

そろり

そろりと一歩前へ

しかし、上手くいかなかった

奴のよだれがマービンの肩に落ちた時、マービンが驚いて叫んでしまった

「ポトっ」

「！！！！」 「ぎゃーーああああ」

「しまった！！」

「ルイ！！ハンドガンの連射だ！」

ウォードとルイが二人でハンドガンを連射した

「バンバンバン」弾丸の嵐だ

奴は天井から落ちて動かなくなった

耐久だけで言うなら奴ら人型の化け物より上だった

これだけではすまなかった

ルイが「おいおい、何だよあれ！」と病室から出て叫んだ

ウォードも病室から出て確認すると、それは地獄絵図だった

さらに奥の病室からさっきの化け物がぞろぞろ出てきた

しかも、遠目にウォードたちが探索した左側からもぞろぞろ出てきている

どうやら繁殖して奴らの巣になっていたようだ

それがさっきの銃声で一斉に出てきたのだろう

「まずい！二人とも走れ」

幸い奴ら人型の化け物と同じで動きはのろまだった

リサと合流して5階に向かった

・  
・  
・  
・



1階のガラスには奴らの圧力で今にも壊れそうだった  
数にして500はいるだろう・・・

## バイオハザードChapter 2（後書き）

第3話頑張って作ります

いつになるのかな

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6646w/>

---

バイオハザードChapter1

2011年12月16日18時59分発行